

飛鳥寺の調査

— 第143 6次

1 はじめに

飛鳥寺は、蘇我馬子が建立した日本最初の寺院である。文献史料には法興寺、または本元興寺という名もみえ、天武朝には大宮大寺、薬師寺、川原寺とともに国の四大寺としての扱いを受けている。『日本書紀』には、用明2年(580)に馬子が飛鳥大仏造営を発願し、崇峻元年(588)に飛鳥衣縫造祖樹葉の家を壊して寺を作る。崇峻5年(592)には大法興寺の仏堂と歩廊を起す。推古元年(593)に仏舍利を刹中の礎の中に納め、刹柱を立てる。推古4年(596)に法興寺造り竟る。馬子の男善徳を寺司に任命する。高句麗僧、百濟僧始めて住む。推古14年(606)に丈六仏完成。元興寺金堂に安置する等の記事がある。一般的には、この推古14年の記事をもって飛鳥寺が完成したと考えられている。

1956～1957年に奈良国立文化財研究所がおこなった調査では、塔を中心としてその北、東、西に金堂を配置するという特異な伽藍配置が明らかとなった¹⁾。講堂は回廊の北側、中金堂の北方にあり、基壇の高まりが来迎寺の境内としてそのまま利用されてきた。

これまで、講堂では計3回の調査をおこなっている。1956年から1957年にかけての1・3次調査では、基壇上の礎石や根石を確認し、講堂は桁行8間、梁行4間の四面廂付東西棟礎石建物であり、基壇外装は玉石積みで、周囲に玉石組の雨落溝があることが明らかとなった。建物の規模は、桁行総長35.15m、梁行総長19mと推定している。1993年には、基壇東北辺で北廂の礎石抜取穴と雨落溝を確認した²⁾。この調査では基壇の断割調査をおこない、講堂は掘込地業をおこなわず、地山上に直接版築をして基壇を築成していることが明らかとなった。2004年には明日香村教育委員会が基壇上を調査し、基壇の版築状況を確認した³⁾。これまでの調査の知見では、講堂

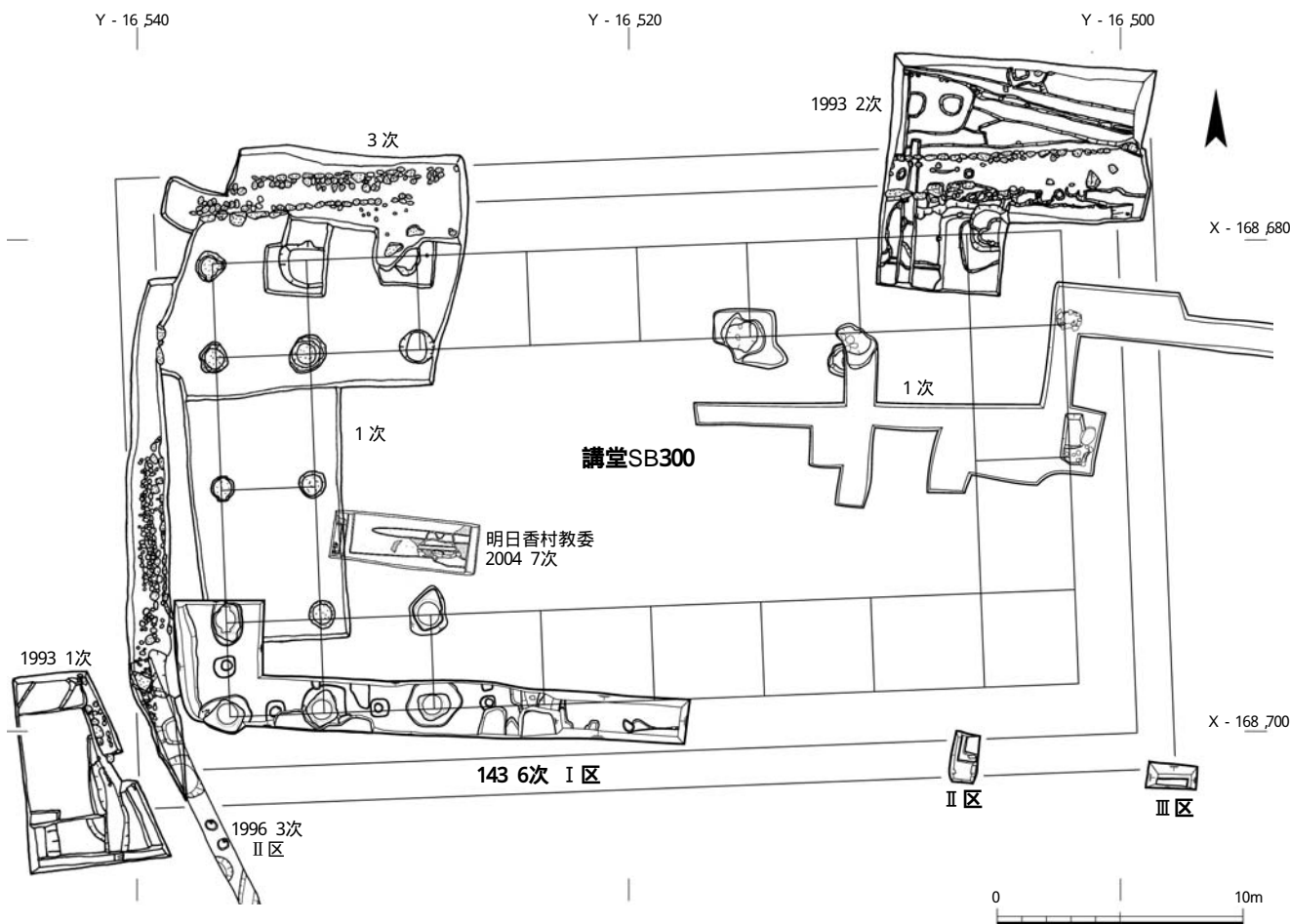


図148 飛鳥寺講堂発掘遺構集成図 1 : 300

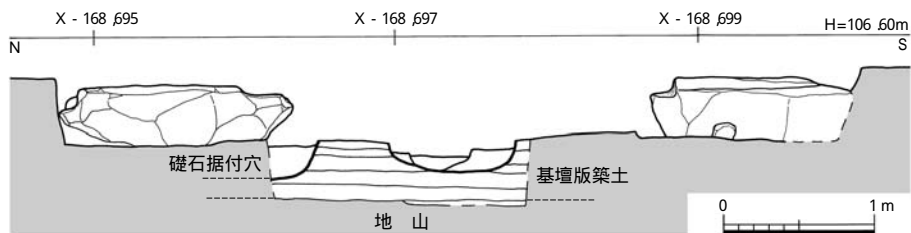


図149 西妻柱礎石立面図、基壇土層図 1 : 50

は創建からほどなくして完成し、平安時代後期には廃絶したと考えられている。

今回の調査は来迎寺の境内で、南面と西面の堀新設とともに事前調査として、遺構の状況を探ることを目的に実施したものである。境内の南端で、西側にL字形のトレンチ（区：51㎡）と東方2ヶ所に小さなトレンチ（区、区：各2㎡）を設定しておこなった。また、調査終了直前に南入側柱の西から2間目の礎石が地表に露出しかけていることが判明したため、この部分に関しては礎石の形状を確認する調査をおこなった。調査は2006年10月30日に開始し、11月21日に終了した。

2 検出遺構

区 基本層序は上から順に約20cmの表土、約20cmの茶褐色土の遺物包含層となる。Y-16,524付近より以東は中世以降に大きく削平を受けており、地表下約0.8mまで攪乱層がおよぶ。そこでは攪乱層直下が地山となり、講堂SB300に係する遺構は既に削平を受けていた。それに対し西半部は遺構の残存は極めて良好で、遺物包含層直下が遺構面となる。礎石は、1次調査で確認していたものを含めて5個検出した。新検出の礎石は4個である。礎石は全て花崗岩製で、大きいもので1.5mほ

どある。上面は平滑で、径約80cmの円形作り出しがある。西妻の側柱の南から1間目の礎石には南北に地覆座があることがすでに明らかになっていたが、北の地覆座の北側には約20cm、南の地覆座の南側には約10cmの割り込みがある。西南隅の礎石でも、北側に同様の割り込みがある（図149）、ともに地覆石を据えたものであろう。また、南側柱の西から2個目と3個目の礎石には、相対する面に打ち欠きがあり、これも地覆石を設置した痕跡の可能性はある。

礎石の周囲には、据付穴を確認した。一辺2m程の不整形で、礎石の形状に合わせて掘っている。礎石は原位置を動いた痕跡はない。一部断割をおこなったが、礎石下には根石を密集して置いている状況ではなく、平面でも根石は一部で確認できるだけである。1次調査では多くの根石を確認しているのとは対照的である。西から3間目以東では礎石は既に抜き取られているが、礎石据付穴を一部で検出した。また、各礎石の間には一辺約80cmの柱穴がある。断割の結果、柱を立てた痕跡はあるものの、深さは約20cmと浅く（図149）足場穴とするには躊躇があり、性格は検討課題である。基壇は掘込地業をおこなわず、茶褐色の土を版築して積み上げ、一部に山土が混じる。基壇の西端は、西側の道路の造成の際に削られ

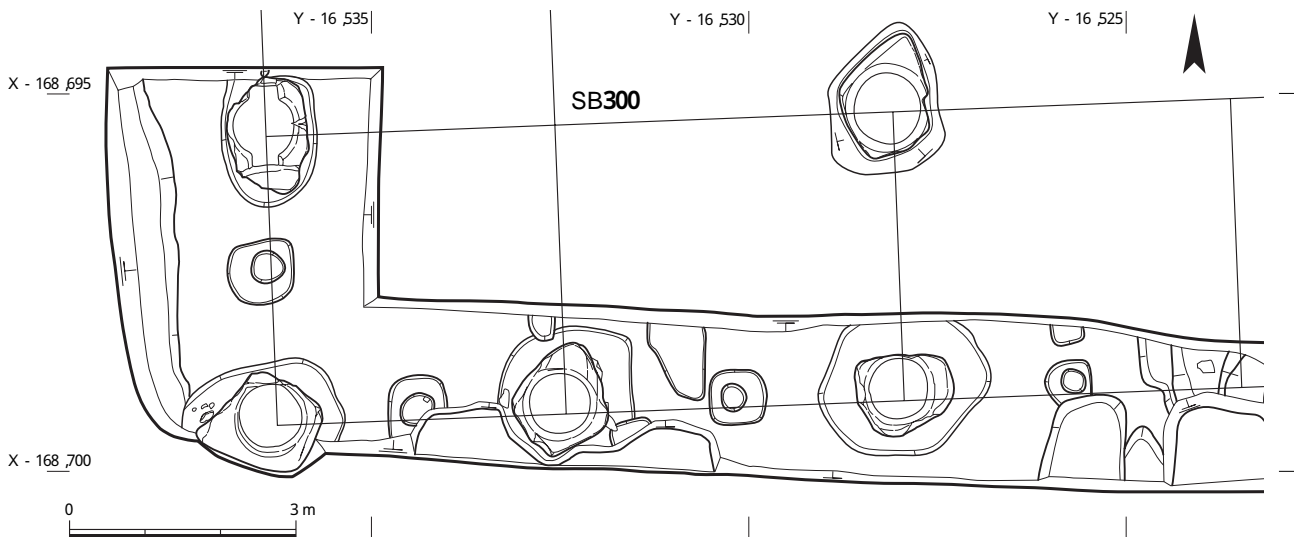


図150 第143 6次調査遺構図 1 : 100

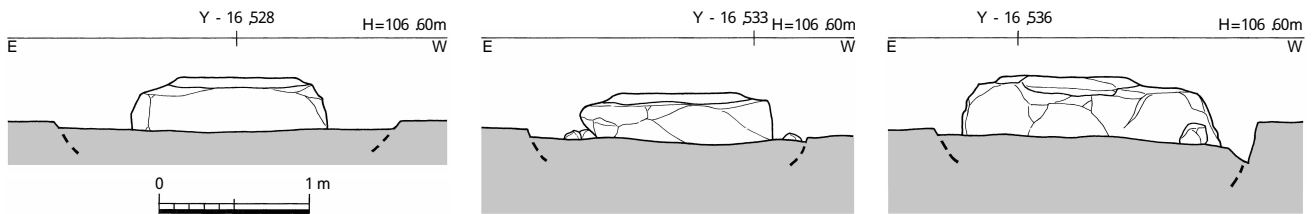


図151 南側柱礎石立面図 1 : 50

たようで、新しい溝が通り、雨落溝等は検出できなかった。その他、基壇上では中世のものと思われる焼土を交えた土坑等を検出し、これは2004年の明日香村教育委員会の調査で検出したものと同様の性格と思われる。

区・区 近代の石組が見つかったが、地表下約1mまで掘り下げても中世の包含層であり、講堂関係の遺構は削られてしまっている。

3 出土遺物

遺物はほとんどが瓦である。古代のものでは軒丸瓦が9点と鴟尾が1点出土した。創建に使われたものや奈良時代に屋根の葺き替えをした時のものがある(表11)。瓦の総量は、調査地が来迎寺境内から出た廃材の置き場になっていたこともあり、調査面積の割には多量であるが、表土からの出土が多く、本来の状況を示すものではない。土器は中・近世のものが少量ある程度である。

表11 出土瓦集計表

軒丸瓦・軒棧瓦			道具瓦	
型式	種	点数	種類	点数
	a	1	面戸瓦	3
	b	1	雁振瓦	1
		1	鴟尾	1
		1	塙	2
	b	1	その他	
または		1	種類	点数
?		1	両面刻線瓦	1
古代		2	刻印付瓦	1
中近世(水切り)		1	丸・平瓦	
近現代		1	丸瓦	129 4kg
橘唐草文軒棧瓦		5	平瓦	397 4kg

4 成果と課題

講堂の遺構 講堂の西南隅を含む南側の柱筋を確認した。礎石は新たに4個検出し、周辺の遺構の残存状況が良好であることが改めて明らかとなった。

今回は西から2間目にあたる礎石を初めて確認し、それによって身舎の桁行部分の柱間が4.48m(15尺)であることが判明した。また廂部の柱間寸法は、今回新たに検出した西南隅の礎石を含めて詳細に検討した結果、3.83m(13尺)となる。身舎の梁行の柱間が5.40m(18尺)であることは既に判明してあるため、今回の調査により、講堂の規模は東西34.54m、南北18.46mであることができる。また、現在地表面に露出している第1次調査で検出した礎石についても、同一の原点を基にして世界測地系で再測量した結果、これまでの一連の調査成果を正確に合成することができ(図148)、講堂の正確な振れは北で西に2°25'であることも合わせて明らかとなった。講堂造営の様子 これまで明らかになった講堂の遺構は、礎石や基壇、あるいは基壇外装と周辺の雨落溝などであった。礎石については、基壇との詳細な関係は不明であったが、今回は礎石とその据付穴等を初めてセットで確認し、初期寺院の建築方法を知る上で、重要な事例を提供したと言える。(玉田芳英)

注

- 1) 奈文研『飛鳥寺発掘調査報告』1958年
- 2) 奈文研『飛鳥・藤原宮発掘調査概報24』1994年
- 3) 明日香村教委『明日香村遺跡調査概報 平成16年度』2005年

